



名大トピックス

No.127 平成15年12月26日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

次期本学総長候補者に 平野眞一工学研究科教授が選出される



松尾 稔総長の任期満了（平成16年3月31日）に伴い、11月25日（火）に開催された臨時評議会において、総長の選考に関する暫定基準第14条第2項に基づき、第3次総長候補者名簿に登載された3名の候補者について、その選考の経緯等を審議した後、評議員による単記無記名による投票を行った結果、平野眞一教授が、第1回目の投票で出席者の過半数を得ました。引き続き開催された選考会議で、評議会からの選考経緯の報告を基に、審議した結果、委員の総意により、平野眞一工学研究科教授を次期総長候補者に決定しました。

なお、新総長の任期は、平成16年4月1日から平成21年3月31日までの5年間となります。

CONTENTS

- | | |
|---|--|
| ・次期本学総長候補者に平野眞一工学研究科教授が選出される... 1 | ・第19回シンポジウム「東アジア産業ダイナミズムと企業の再生」
が開催される..... 9 |
| ・テクノ・フェア名大'2003'が開催される..... 2 | ・大学院経済学研究科が江蘇省社会科学院と学术交流協定
を締結する..... 10 |
|  ・素粒子標準理論の検証に関する日欧国際共同研究
丹羽 公雄..... 4 | ・博物館が中学生の職場体験学習を受け入れる..... 10 |
| ・大学院経済学研究科がマーリーズ教授(1996年ノーベル賞受賞)
による講演会を開催する..... 6 | ・博物館が秋の野外実習「ドングリを知ろう」を実施する... 11 |
| ・附属図書館が秋季特別展を開催する..... 7 | ・附属農場が農業館を利用して連続講演会(第6回)を開催する... 11 |
| ・地震防災訓練が実施される..... 8 | ・永年勤続者表彰式が開催される..... 12 |
| ・大学院生命農学研究科がシンボルマークを制定する..... 8 | [INFORMATION] |
| ・大学院多元数理科学研究科が
第3回名古屋国際数学コンファレンスを開催する..... 9 | ・博物館企画展「野外観察園の植物たち」..... 13 |
| | ・本学関係の新聞記事掲載一覧(15年11月分)..... 14 |



テクノ・フェア名大 2003 'が開催される - 企業と大学との新しい関係を築くために -

大学院工学研究科及び関連研究科・センターは、11月7日（金）豊田講堂及びシンポジオンホールにおいて、テクノ・フェア名大'2003'を開催しました。

これは、大学にあるシーズ（種）の展示、研究室公開及び講演会等を通じ、大学の研究成果を広く公開し、新規産業の創出や既存産業の技術の高度化を推進する機会を設け、より一層の「産学官連携」を目指していくことを目的に開催されたものです。今回は、同研究科が平成11年に初めて実施した総合的な研究公開から数え、第4回目の開催となり、中部経済産業局、愛知県、中日新聞及びNHKをはじめとした中部地区の経済及び報道関係者や企業の研究開発担当者等約750名、本学の教官及び大学院学生等を含む関係職員約250名の計約1,000名が訪れ、昨年（約700名）を上回る来場者数を記録しました。

当日は、平野工学研究科長による「名古屋大学工学研究科の産学官連携の取り組み」と題したあいさつがあり、続いて、末永康仁情報科学研究科教授による「社会情報基盤のための音声・映像の知的統合 - 音声および映像の知的処理の基礎と応用 - 」及び大日方五郎先端技術共同研究センター教授による「人を知る・つくる・支援する - 身体特性のモデリング技術に基づいた人間福祉医工学 - 」をテーマとした講演が行われ、約250名もの参加者でシンポジオンホールは満員となり、立ち見が出る程の盛況となりました。



展示ブース「未来のテレビを覗いて見よう」

また、展示会場には、多くの企業の研究開発担当者等が訪れ、各ブースの担当者に、実用化に向けての相談や、互いの意見交換、さらには、大学側に対して、新たな研究課題を提案するなど、企業側の同フェアへの関心の高さを伺わせました。特に、「からくり人形展」（末松良一同研究科教授）「自然と調和した21世紀の新しい科学『プロトニクス』自然の磁気で健康増進」の体験コーナー（毛利佳年雄同研究科教授）及び「未来のテレビを覗いて見よう」（谷本正幸同研究科教授）の展示会場では、多くの人が足を止め、展示物に見入ったり、実際に体験したりと、終日、賑わいをみせていました。

さらに、今年は、昨年開催した際に行った来場者ア



あいさつをする平野工学研究科長



アンケートの意見に基づき、午後に、シンポジオンホールにおいて、出展している研究者の中から、分野等を考慮し選ばれた4名の方が、展示している研究の概要を説明しました。

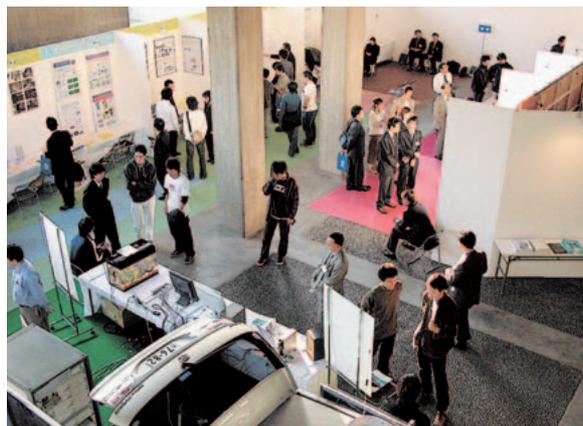
今回は、研究室見学の申込みも増加し、具体的に共同研究へ向けて動き出した研究室がある等、成果も目に見えて挙がっています。また、フェア終了後、NHKで当日の様様と同研究科の産学官連携の活動が大々的

に放送される等、今後に大きな期待を抱かせる結果となりました。

なお、同研究科では、この成果を報告書にまとめ、さらに産学官連携を推進していくこととしています。



からくり人形展



賑わう展示ブース会場



素粒子標準理論の検証に関する 日欧国際共同研究

丹羽 公雄

名古屋大学とヨーロッパとの国際共同研究ニュートリノに関する OPERA 計画を紹介します。

ニュートリノは光とよく似ています。ニュートリノは1個2個と数えられる「質量の無い粒子」とされ、3つのタイプ(電子ニュートリノ、ミューニュートリノ、タウニュートリノ)が知られています。ニュートリノは光と同じようにガラスや水を通りますが、厚い鉄板や岩盤・地球さえも貫通する不思議な粒子です。

万物が原子から作られていることが明らかになったのはフランス革命ころ。それから200年、現代物理学(素粒子物理学)はその原子を構成する究極の要素(クォーク・レプトン)に到達しました。ニュートリノは究極の要素のひとつです。素粒子物理学は宇宙創成から、太陽・地球の消滅までの物語を書く基礎理論「標準理論」を構築しました。生命科学、材料科学などの人類に極めて有用な学術・技術は一昔前の現代物理学の賜物です。

しかし、1987年、「ニュートリノの質量をゼロとする標準理論」が揺るぎました。神岡町のカミオカンデは太陽から飛来

するニュートリノの個数が理論予想より少ないという観測値を発表したのです。少ない理由は太陽で作られた「電子ニュートリノ」が、地球に届くまでに「ニュートリノ振動」のメカニズムで「別のタイプのニュートリノ」に化けたとしか考えられません。「ニュートリノ振動」は1962年に名古屋大学の故坂田昌一教授によって提唱された仮説です。この仮説によれば、ニュートリノに質量があればニュートリノは時間の経過につれてその種類を自ら変えます。カミオカンデの観測から「ニュートリノ振動」仮説が現実になり、質量ゼロとされたニュートリノが質量をもつ可能性が出てきたのです。

その後世界中で「ニュートリノ振動」の追試が行われ、中でもスーパーカミオカンデは宇宙線が作っているニュートリノの減少を見事に捉えました。しかし、化けて出現しているはずのニュートリノの検出には誰も成功していません。

OPERA 計画は「ニュートリノ振動」で出現するニュートリノを捉えることを目標にしています。この計画は、名古屋グループが長年の懸案であった第3番目のタイプの「タウニュートリノ」の存在の実証に成功したことから始まりました。図1は2000年に、世界で初めて特殊な写真フィルムで捕えた「タウニュートリノ」の反応です。この事象は積層した特殊な写真フィルムの中に記録された素粒子の数十億本の飛

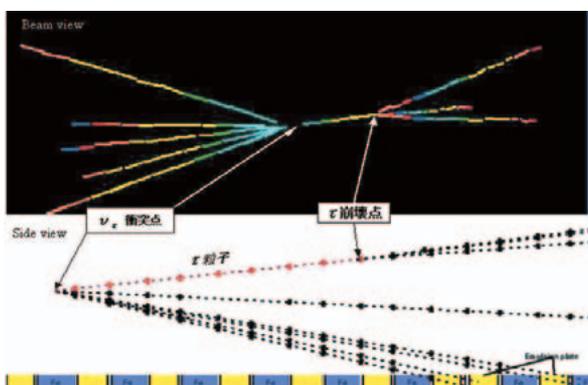


図1 世界で始めて検出されたタウニュートリノ反応
下図の左方から飛来したタウニュートリノが粒子と4本の湯川粒子を作り、粒子は7mm飛行したあと更に3個の粒子に崩壊している。上図は下図の飛跡をニュートリノを背に投影している。



写真1 飛跡自動読み取り装置 右方に高速カメラ(毎秒3000画面)を装着した顕微鏡、左方には自作の並列コンピューターが見える。

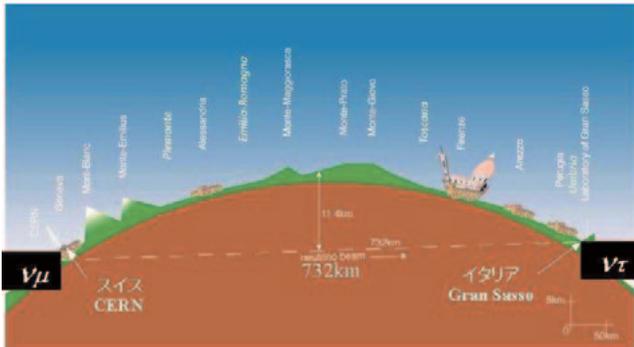


図2 OPERA 計画 ミューニュートリノが732km 飛行中に替わったタウニュートリノを捉える。

跡群の中から見つかりました。膨大な飛跡群の中からタウニュートリノ反応を探し出すことができたのは、名古屋大学で20年以上の年月を費やして開発した「素粒子飛跡自動読み取り装置」(写真1)と、やはり名古屋大学と富士写真フイルム社とで共同開発した特殊な写真フイルムという2つの実験基盤、世界が真似のできない独自技術を持ったからです。

OPERA 計画は図2に示すように、スイスで射出する「ミューニュートリノ」をアルプス山脈の下を真っ直ぐに貫通させてイタリアのローマ郊外で捕え、別のタイプ「タウニュートリノ」に化けていないかを調べます。ニュートリノの検出器は宇宙線の飛来しない地下1400m(アペニン山脈を貫通する高速道路の中間点に建設された Gransasso 研究所)に設置します。

ニュートリノの射出器はヨーロッパ連合が運営するスイスのジュネーブにある巨大加速器です。

検出器の心臓部は特殊な写真フイルムと鉛板(厚さ1mm)を交互に積層して作ります。この写真フイルムに、もしランダムな飛跡があると解析の障害になりますが、製造工程で宇宙線や自然放射線の飛跡が蓄積するのを避けられません。この飛跡を除去しなければ OPERA 実験に使えません。この問題を解決するために飛跡などの記録をいったん消し去る「リフレッシュ処理」という写真技術を開発しました。そのためリフレッシュ処理装置を放射線の少ない地下(土岐市の核燃料サイクル開発機構の地下施設)の場所を借りて建設(写真2)しました。OPERA 実験で使う写真フイルムは、

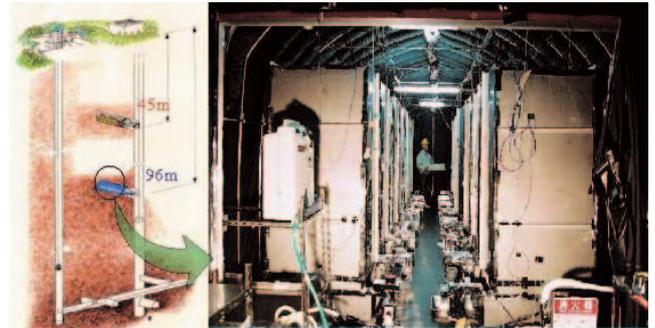


写真2 土岐市の東濃鉱山(左図)と地下に建設した一度にフィルム8000枚をリフレッシュする装置群14台の写真。2003年12月に完成。

大きさがはがき大で、枚数は約1000万枚です。

ニュートリノ照射が始まる2006年度中には、ニュートリノ振動の直接の証拠「タウニュートリノ」を2-3例は捉えられる予定です。5年間の照射期間を待たずに「ニュートリノ質量」の決着がつくでしょう。そして標準理論の変更を大いに刺激するでしょう。

この計画は大学の手に余る20億円を超す規模ですが「新プロ、今日の学術創成研究費」の予算で始まりました。独立法人化される大学で、この規模の国際プロジェクトを推進できるのか、名古屋大学の真価が問われています。

プロフィール

にわ きみお

昭和21年生まれ。昭和44年信州大学文学部自然科学科卒業、昭和50年日本学術振興会奨励研究員、昭和51年名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了。昭和53年名古屋大学理学部助手、同助教授を経て、平成6年から同教授。平成8年名古屋大学大学院理学研究科教授。平成15年2月から高等研究院流動教官を兼任。理学博士。専攻は、素粒子物理学、特にタウニュートリノの存在の検証、ニュートリノの質量。原子核乾板の開発改良と顕微鏡映像の立体認識。平成14年日本物理学会論文賞を受賞。





大学院経済学研究科が マーリーズ教授(1996年ノーベル賞受賞)による講演会を開催する

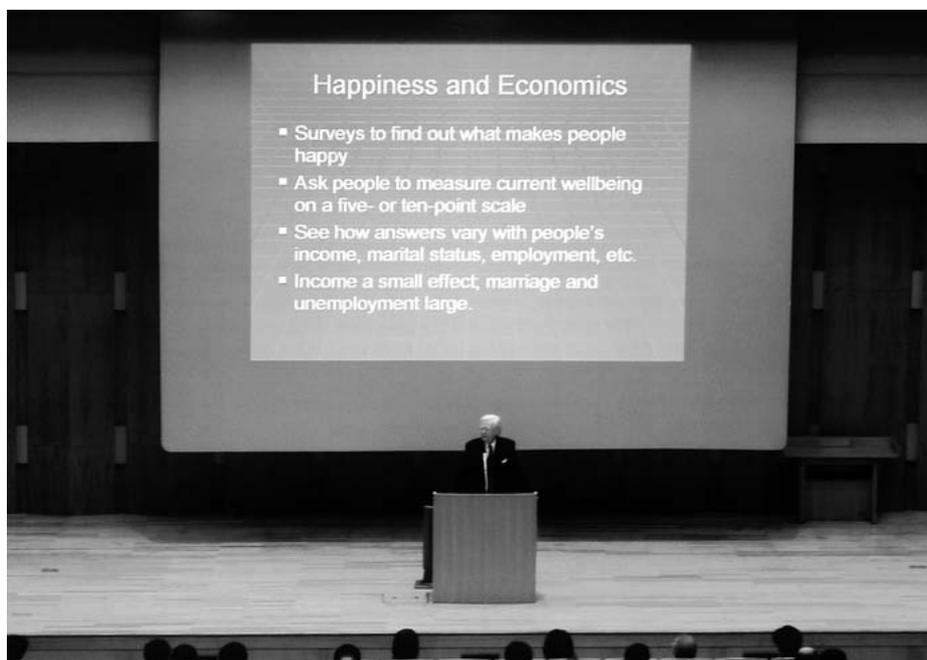
大学院経済学研究科は、本学全学同窓会及び社団法人キタン会(経済学部同窓会)の後援を得て、12月1日(月)豊田講堂において、ケンブリッジ大学トリニティカレッジのジェームズ・マーリーズ教授による講演会を開催しました。

マーリーズ教授は、非対称情報の下でのインセンティブ理論と呼ばれる先駆的な研究及び最適課税理論の研究により、1996年にノーベル経済学賞を受賞されました。

今回の講演「What Good Does Economics Do? (経済学への期待)」は、経済学を専攻する者に限らず、学部学生、大学院学生、教官、同窓生及び社会人を対象に準備していただいたもので、当日は、同時通訳に加

え、要約通訳も行われました。

講演会では、経済理論における「新しい発想」は、発明や作曲のように繰り返し使用可能なものであり、その積み重ねにより大きな力として働くということが強調されました。また、人々が合理的に行動することを前提とする経済学の学問としての有効性と限界、さらに経済学が現実の経済に大きな影響力をもつことに起因する政策策定の難しさなどに対し、教授の考えが述べられました。最後に、教授から経済学を志す若者へ、激励の言葉がかけられ、講演会は終了しました。参加者は、今回の講演で、経済学の持つ意義とその貢献について、理解を深めたようでした。



講演するマーリーズ教授



附属図書館が秋季特別展を開催する

附属図書館は、10月17日（金）から30日（木）まで、同館研究開発室と共催で、秋季特別展として、伊藤圭介生誕200年記念展示会「錦窠（きんか）図譜の世界 幕末・明治の博物誌」を開催しました。

伊藤圭介（1803 - 1901）は、名古屋出身の医家・本草家で、シーボルトに師事し、日本に初めて近代的な植物分類法を紹介し、おしべ・めしべ・花粉などの訳語を生み出したとされ、我が国の近代科学史上に大きな足跡を残しました。また、本学医学部の前身である仮病院・仮医学校の設立（1871年）にも寄与し、本邦最初の理学博士になっています。

この展示会は、同館が所蔵する伊藤圭介の遺稿である『錦窠植物図説』を中心として、獣・虫・魚等の動物を扱った図譜や、『泰西本草名疏』（たいせいほんぞうめいそ）『日本産物志』などの編著書を展示・解説するとともに、これらの図譜の電子展示も併せて行うことにより、伊藤圭介の学問や人間像を明らかにし、彼の生きた時代・歴史を考える機会を提供しようとし

たものです。

土曜、日曜も含めた13日間にわたる開催期間中、本学の教職員、大学院学生及び学部学生のほか、一般市民も含め、約500名もの入場者があり、非常に好評でした。

また、展示会に関連して、10月18日（土）に、「博物誌の時代と伊藤圭介」と題した記念講演会が開催されました。講演会では、磯野直秀慶應義塾大学名誉教授による「日本の博物誌と伊藤圭介」、土井康弘国士館大学非常勤講師による「日本初の理学博士の誕生」、杉山寛行文学研究科教授による「伊藤圭介と医学」の講演が行われ、120名の参加者が熱心に聴講しました。講演会終了後には、多くの人が展示会の展観を楽しみ、閉室時間を超過するほどの賑わいとなりました。

なお、電子展示(<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/db/keisuke/redirect.html>)は、検索システムの機能を強化するなど、充実が図られており、展示会期間終了後も引き続き公開されています。



電子展示



展示会の様子（中央図書館4階展示室）



地震防災訓練が実施される

名古屋大学地震防災訓練が、11月5日(水) 全学の教職員及び学生、消費生活協同組合等が参加して実施されました。

この訓練は、名古屋市が地震防災対策強化地域に指定されていることに伴い、実施されたもので、東海地域に大規模災害が発生することを想定して、就業時間内における地震防災体制確立の一環として情報伝達訓練を実施し、教職員及び学生等の防災意識の高揚を図ることを目的としています。

当日は、午前9時25分に東海地震判定会議が招集されたとの想定で行われ、松尾総長を長とする災害対策統括本部及び災害対策支部の設置、同本部から事務局及び各部署への情報伝達訓練等が実施されました。また、講義中の先生が、講義を一時中断し、学生に対して、東海地震の警戒宣言発令時及び突発的に大地震が発生した場合の対応について説明しました。さらに、研究室では、研究室内にいる学生に、これらの場合の対応とともに、研究室・実験室等における二次災害の防止措置等の説明がありました。

なお、同訓練後、全教職員に対して、伝達所要時間や問題点等についてのアンケートを実施し、自然災害対策室でこれらを整理の上、災害時に備えます。



災害対策統括本部



大学院生命農学研究科がシンボルマークを制定する



大学院生命農学研究科は、広く学内外に親しまれ、社会に対し同研究科のイメージをPRすることを目的として、このほどシンボルマークを制定しました。

山本同研究科長の提案により、部局構成員に公募したところ、7件の応募があり、投票の結果、後藤麻木同研究科助手が作成したシンボルマーク上図が選ばれました。

このシンボルマークは、同研究科のトレードマークであるメタセコイヤの木がだんだん大きく成長していく過程を描くことによって、同研究科の業績等が右肩上がり伸びることを期待したものです。カラーバージョンの色については、木の緑はそのものを、英語の頭文字の赤は太陽を表し、幹の下の青は水を表しています。すなわち地球上で生命が生きていく上で、かけがえのない太陽・光(赤)、植物と大地(緑・茶)、海河川・水(青)を表しています。

今後は、同研究科のシンボルマークとして、同研究科で刊行する印刷物をはじめ封筒等各種用途に幅広く使用していくことにしています。



大学院多元数理科学研究科が 第3回名古屋国際数学コンファレンスを開催する

大学院多元数理科学研究科は、11月10日(月)から12日(水)まで、大学院国際開発研究科多目的オーディトリウムにおいて、第3回名古屋国際数学コンファレンスを開催しました。この国際会議は、21世紀 COE プログラム「等式が生む数学の新概念」(拠点リーダー・宇澤 達多元数理科学研究科教授)の事業開始を記念するもので、数学における最も基本的な概念である「数・対称性・空間」をテーマとして、最新の研究成果に関する11の講演が行われました。講演者は、数論・表現論から幾何学・数理物理学に至る幅広い分野から選ばれ、参加者との多くの議論を通して分野間の交流を深めました。COE 採択から会議の開催に至るまでの時間的余裕があまりありませんでしたが、ウェブを通じた広報の甲斐もあり、海外からの9名を含め67名の参加者があり、また、学生の参加者も17名に達し、COE プログラムの重要な目的である若手研究者の育成にも十分な役割を果たしました。

詳しくは <http://www.math.nagoya-u.ac.jp/> をご覧下さい。



講演の様子



第19回シンポジウム「東アジア産業ダイナミズム と企業の再生」が開催される

大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センターは、社団法人キタン会と共催で、11月22日(土)第19回シンポジウム「東アジア産業ダイナミズムと企業の再生」を開催しました。同シンポジウムは、現在、東アジアは自由貿易と対中投資の急増によって各国の産業構造が再編される新しい産業ダイナミズムの時代に入っており、こうした流れに東アジア諸国経済・企業がどう対応していくのかを探ることを目的として開催されたものです。開会にあたり、奥野副総長及び松枝寅太郎キタン会副会長からあいさつがあり、続いて、平川センター長がシンポジウムの主旨を説明しました。シンポジウムは、3部構成で行われ、第1部は、「中国工業化ダイナミズムと国際経営の再編」と題して、日本、韓国、台湾、タイ及びベトナムの研究者が報告し、第2部「わが社はグローバル化にどう対応しているか - 対中投資の影響と各企業の対応 -」では、日中の企業経営者が自社の経験を報告しました。第3部では、「東アジア産業ダイナミズムにどう対応するか」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、議論を通じ、近年急速に拡大する対中投資の実態と送出し国側の企業が進める企業再編や新戦略等が明らかにされました。



シンポジウムの様子



大学院経済学研究科が 江蘇省社会科学院と学术交流 協定を締結する

大学院経済学研究科は、11月25日（火）北原研究科長と宋林飛江蘇省社会科学院長が学术交流協定書に署名し、同協定を締結しました。

江蘇省社会科学院から同研究科に学术交流協定の申込があったのは、2001年春のことで、それ以降、共同研究等の実績を積み重ね、今回、経済及び経営に関わる学術調査研究をはじめ3項目の交流活動について締結が行われました。

江蘇省社会科学院は、1958年の創立以来、38の重要国家プロジェクトの推進を担い、142もの江蘇省のためのプロジェクトを推進しています。また、これまで学術書は500冊以上、発表論文は8000本以上に達しています。現在、同院は、研究員34名、副研究員47名を含め200名の職員、専門機関として、9研究所2センターを擁しており、『江蘇経済探討』、『世界経済与政治論壇』等6種の定期学術出版物を刊行しています。

今回の学术交流協定の締結は、同研究科にとって、学術研究及びアジアの工業化に関する日本の研究拠点としての拡充を図る上で、大きな意味があり、また、同研究科の経済学及び経営学の研究者が、研究視野を広げるための様々なテーマ設定と共同研究が可能になると見込まれます。



学术交流協定を締結する北原研究科長(右)と宋林飛院長(左)



博物館が中学生の 職場体験学習を受け入れる

博物館は、11月13日（木）、14日（金）、名古屋市立城山中学校からの職場体験学習の申し入れに応じ、1年生4名を受け入れました。

両日とも、まず全員で展示ケースの掃除等の開館準備を行った後、各々の担当に分かれ、博物館スタッフとともに仕事をしました。

1日目は、乾燥させた植物を使って標本を作製しました。慣れない手つきでコテを使いながら、紙テープで標本を丁寧に台紙に貼り付けていきました。必ず植物の形全体がわかるように、茎・葉・花等が揃った形で採集することが大切だということ、採集した標本から新種が見つかることもあること等の説明があり、中学生は、熱心に耳を傾けていました。

2日目は、デジタルカメラで標本を撮影しました。また、電子顕微鏡を使った写真撮影では、肉眼ではよく分からない星砂の神秘的な形に感動していました。博物館のイベントを紹介するポスター作りでは、畳一枚の大きさまで印刷出来る大型プリンターで初めて作ったポスターを嬉しそうに展示室に貼っていました。

最後に、中学生から、「博物館にはいろいろな仕事があることがわかった」、「いつもは展示ケース越しにしか見られない標本に触ることができて嬉しかった」等の感想が述べられ、2日間の職場体験学習は終了しました。



職場体験学習の様子



博物館が秋の野外実習 「ドングリを知ろう」を実施する

博物館は、11月15日(土) 秋の野外実習「ドングリを知ろう」を実施しました。今回の実習には、中学生2名、高校生6名を含む11名が参加し、午前中は、博物館の野外観察園でアベマキ・スタジイ等のドングリの木の葉や実の特徴及び見分け方について説明を受けた後、実際に葉や実を手に取り、ルーペも使ってじっくり観察しました。

午後からは、博物館で、縄文人が食べていたクリの団子を作りました。実際に、縄文時代の遺跡から出土した石皿と擦石等を使って、クリの殻を取り、かなりの時間をかけて、細かく砕いて粉にした後、これに鳥肉等の材料を混ぜて団子状にしてから茹でました。出来上がった団子には、石皿や擦石から削れた石の粉が混じっており、食べるとジャリジャリし、あまり味がないものでした。このようなものを食べていたので、出土する縄文人の歯がかなりすり減っていたこと、この時代には骨髓や塩ぐらいしか調味料がない分、素材そのものの味に近いものを食べていたという説明に、参加者は、感心しつつ、試食していました。

アンケートには、「ドングリにいろいろな種類があることがよくわかった」、「シンプルな味だけど、おいしいかも」等の感想が書かれており、特に、団子は、強く印象に残ったようでした。



拾ったドングリについて質問する参加者



附属農場が農業館を利用して 連続講演会(第6回)を開催する

大学院生命農学研究科附属農場は、農業館を利用した連続講演会の第6回として、11月22日(土)、吉岡敏彦春日丘高等学校教頭による「メダカからの発信 - 絶滅かといわれてから5年、私たちは今」と題する講演を開催しました。

講演会は、日本のメダカのルーツ、メダカは、DNA解析により、国内でも大きく8つのグループに分類され、愛知県内でも尾張と三河に細分されるという説明から始まりました。続いて、メダカには、全国で4,500もの呼称があり、これは、メダカが古くから我々の文化・生活に根付いていたことを示しているが、現在では、絶滅危惧種として「レッドデータブック」に掲載され、各地で保護活動が盛んであること等について話されました。メダカの生息数が減少してきた理由として、メダカが生息してきた水田の用水路の形式が変更されてきたこと、第2次世界大戦後に、保健衛生を目的に、蚊を絶やすために導入されたカダヤシ、ブルーギル及びブラックバスとの競合により、生息地域を狭めていることが挙げられました。特に、泳いでいるときは外見上、メダカと区別することが困難であるカダヤシは、メダカと比較して繁殖力が強く、生息域が重なるメダカを駆逐しているようです。最後に、吉岡氏は、「今後の方針として自然環境の保護及び再生に関して、人工飼育等を織り交ぜながらメダカを素材にして、自然を愛する心の教育を推進していきたい」と締め括りました。

附属農場では、来年度も土曜日の午後を利用して、農業、自然に関連した講演会を計画しています。講演会については、生命農学研究科ホームページでお知らせする予定ですので、興味のある方はご参加ください。



永年勤続者表彰式が開催される



あいさつする松尾総長

平成15年度文部科学省永年勤続者表彰伝達式及び平成15年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月21日（金）豊田講堂第一会議室で行われ、松尾総長から被表彰者一人一人に表彰状と記念品の銀盃が手渡されました。

次いで、総長から、「法人化を目前にした今、事務の合理化が必要とされ事務官等の負担がますます増大していますが、今後とも健康に留意され、国の高等教育の発展のため、より一層ご尽力いただきたい。」とあいさつがあり、被表彰者を代表して附属図書館の川添真澄氏から、「法人

化を好機ととらえ、常に学び自らの役割を自覚し、確固たる信念をもって職務を全うすることが我々の義務であると認識し、次世代の人たちに恥じぬよう今後とも努力していきたい。」と謝辞の中で決意が述べられました。

引き続き行われた記念撮影の後、シンポジオンホールにおいて、総長主催による懇談会が開催され、被表彰者を囲んで、総長、副総長、事務局長をはじめ関係部局長等と和やかな雰囲気の中で懇談が行われました。

文部科学省永年勤続被表彰者(7名)

水内 邦顕	多田 正和	藤木 智夫
福田 幸雄	古田 牧男	赤塚 正夫
平石 寛治		

名古屋大学永年勤続被表彰者(22名)

林 清	村手 隆司	大野 昭彦
佐田 隆昭	川添 真澄	塚崎 一彦
坪井能里子	都筑 立子	水口幾久代
永家 清考	石田 康博	梶浦 容子
三宅 良和	近藤 悟	増永 悦子
畠山 和人	長寄 厚子	中村 啓子
伊藤 生江	安田 浩明	戸松 浩
中務 孝広		



謝辞を述べる被表彰者代表



記念撮影

INFORMATION

博物館企画展「野外観察園の植物たち」

NUM The Nagoya University Museum Special Display
第3回 名古屋大学博物館企画展

Plants in the Nagoya University Museum Botanical Garden
名古屋大学博物館
野外観察園の植物たち



2004 1/21 (水) - 2/20 (金)
開館時間：午前10時～午後4時
*入館は午後3時30分まで
休館日：月・火曜日

名古屋大学博物館 (東山キャンパス内)
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
地下鉄名古屋大学駅2番出口よりすぐ
(駐車場がありませんので公共交通機関をご利用ください。)

問合せ先=名古屋大学博物館
TEL:052-789-5767, FAX:052-789-5896
URL: <http://www.num.nagoya-u.ac.jp>

身障者用駐車場
スロープ
多目的トイレあり

入場無料

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（15年11月分）

	記事	月日	新聞等名
1	国立大学法人評価委員会の初会合委員長にノーベル化学賞受賞者の野依良治・特任教授を選出	11.1(土) 11.2(日)	日経(朝刊) 他4社
2	学生たちは各党の教育改革をどう見ているのか「心の問題、法で規定疑問」後藤賢二・経済学部4年	11.1(土)	朝日(朝刊)
3	連続公開セミナー「紛争地もしくは紛争後地域における人道援助の実際」法政国際教育協力研究センターで開催	11.1(土)	朝日(朝刊)
4	近畿大学で21世紀COEプログラム選定記念シンポジウム ノーベル化学賞受賞者・野依良治・本学特任教授が基調講演	11.2(日)	サンケイ
5	Weekly教育:本学学生ら出資募り「カフェ」開店へ 指南役は細谷辰之・経済学研究科教授	11.2(日)	朝日(朝刊)
6	「面接教育相談」の参加者募集 講師は陸山英順・教育発達科学研究科教授	11.2(日)	読売
7	全学同窓会が総会 会長は豊田章一郎・トヨタ自動車名誉会長	11.3(月)	中日(朝刊)
8	学生獲得競争が激化 本学の教授らが中心となりオープンカレッジ「自由奔放!!サイエンス」を実施、大学の魅力をアピール	11.3(月)	中日(朝刊)
9	秋の叙勲:瑞宝中経章 柘植利之・名誉教授、森一美・名誉教授、鈴木太七・名誉教授、飯田喜四郎・名誉教授、竹村彰祐・名誉教授	11.3(月)	中日(朝刊)
10	各党マニフェスト「環境施策」を柳下正治・環境学研究科教授ら識者が評価	11.3(月)	毎日(朝刊)
11	東山動物園「メダカと日本人」講演会 イベントでは特別展で本学が開発した透明メダカを展示	11.3(月)	中日(朝刊)
12	名大サロンの主役:梶田正巳・教育発達科学研究科教授 「心理学的認識論」と題し講演 人はどう認識するか	11.4(火)	中日(朝刊)
13	テクノ・フェア名大2003 医工連携など46件紹介 工学部など主催	11.4(火) 11.8(土)	日刊工業 中日(朝刊)
14	学生之新聞:衆院選3候補を丹羽亜衣・本学3年ら学生記者が直撃	11.4(火)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
15	科学技術ランク付け開始から2年不満ぞくぞく 野依良治・特任教授「研究の評価は主観的にならざるを得ない」	11.4(火)	中日(夕刊)
16	教育基本法改正争点見えず 現場の先生『置き去り』中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授「地域や家庭での広い議論が必要」	11.4(火)	中日(夕刊)
17	ロシア科学アカデミー・科学パートナーシップ基金が野依良治・特任教授に金メダルを贈呈	11.5(水)	日刊工業 中日(朝刊)
18	考古科学シンポジウム 中村俊夫・年代測定総合研究センター教授、山本直人・文学研究科教授らが報告	11.5(水)	中日(朝刊)
19	三重大学出版会修士論文賞 惟信高教諭の筒井正・本学大学院生ら“社会人修士”3人が受賞	11.5(水)	中日(朝刊)
20	科学と音楽の夕べ ニッポン夢おこし from 浜松 野依良治・特任教授による特別講演会など	11.6(木)	日経(朝刊)
21	老年学:生きること老化と同義 井口昭久・医学系研究科老年科教授	11.6(木)	朝日(朝刊)
22	衆院選 マニフェスト学生にどう届いた? 「社会が働く夢喪失」本学の就職資料室では企業選びのポイント自己PRなどを伝授	11.6(木)	毎日(夕刊)
23	日本IBM科学賞 化学で阿波賀邦夫・理学研究科教授らが受賞	11.7(金)	中日(朝刊)
24	12月13日地下鉄4号線延長開業 「本山」駅周辺「名古屋大学」と本学の名がついた駅が誕生	11.7(金)	毎日(朝刊)
25	県皮膚医師会は「第15回『皮膚の日』愛知県民の集い」を開催 早川律子・医学部環境皮膚科学講座客員研究員が講演	11.7(金) 11.9(日)	中日(朝刊) 読売
26	豊田合成の研究:次代の光を求めて “青い鳥”を発見 赤崎勇名誉教授が開発したLED ゼロからの出発	11.6(木) 11.7(金) 11.11(火)	日刊工業
27	教育:暗中模索の国立大評価委 国立大学評価委員会委員長・野依良治・特任教授は具体的な評価方法は今後の検討課題であることを示唆	11.8(土)	日経(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
28	小野耕二・法学研究科教授のゼミ学生らが候補の選挙事務所を訪問 現実政治、事務所まで学べ	11.8(土)	朝日(夕刊)
29	名古屋市「つくりませんか報道被害者支援ネットワーク」シンポジウム開催 「マスコミと人権を考える東海の会」(代表・平川宗信・法学研究科教授)が主催	11.9(日)	中日(朝刊)
30	トリカの家友の会住宅セミナー 福和伸夫・環境学研究科教授らが講演	11.9(日)	中日(朝刊)
31	後房雄・法学研究科教授 「政権選び」知った有権者	11.10(月)	中日(朝刊)
32	なぜなぞ科学：日本のオーロラはなぜ赤い 塩川和夫・太陽地球環境研究所助教授	11.10(月)	毎日(夕刊)
33	この人に聞く：ITS世界会議を推進、森川高行・環境学研究科教授 ITS利用で渋滞緩和、環境保全にもなり万博に合致	11.11(火)	読売
34	インド美術仏教美術研究会 文学研究科237室で開催	11.11(火)	中日(朝刊)
35	Withきゃんぱす：人力飛行機サークル「Air Craft」 目指せ「鳥人間」3000メートル	11.11(火)	朝日(朝刊)
36	目指せ！環境型社会 2004年4月から理系・文系を一体的に活用する「融合プロジェクト」を始める 21世紀の環境・循環型社会の構築に役立てる	11.12(水)	日経(朝刊)
37	さーくるナビ：歌声通じて新たな出会い 本学から始まった名古屋アカベラサークル「JP-act」	11.12(水)	中日(朝刊)
38	未来塾講座「市民社会の発展を目指して」 中西久枝・国際開発研究科教授「女性の権利と市民社会」	11.12(水)	中日(朝刊)
39	大学のMOTプログラムの設置計画 本学は定員10人以下でバイオビジネスに特化し、05年度に開講予定	11.12(水)	日刊工業
40	社長さんから起業を学ぼう 名古屋で討論会 本学学生らは学生の参加を呼びかけている	11.12(水)	中日(朝刊)
41	「分離分割」国立大入試 前後期一本化に道 条件付きで06年度から 本学では受験機会確保のため今のところ見直しは検討していない	11.13(木)	朝日(朝刊)
42	本学やデンソーなどでつくる産学連携グループ ITS技術を利用して経路誘導サービス事業の研究開発を開始	11.13(木) 11.17(月)	読売 日刊工業
43	もう一つのトロン トップアーズを追え：拡大する共同開発の輪 高田広章・情報科学研究科教授らが起こした「TOPPERSプロジェクト」	11.13(木)	日刊工業

	記 事	月 日	新聞等名
44	訃報：舟橋豊名誉教授 12日脳出血のため死去	11.13(木)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
45	司法試験に1170人合格 本学は14人で15位	11.13(木)	中日(朝刊) 他2社
46	本学とトヨタ自動車は環境対策など次世代技術の共同研究で包括提携	11.14(金)	日経(朝刊)
47	ゴールデンエイジクラブが総会開く 井口昭久・医学系研究科教授が講演	11.14(金)	毎日(朝刊)
48	昭和大医学部教授が論文に架空症例・虚偽 日本脳神経外科学会会長・吉田純・本学医学系研究科教授「論文にうそ、大変な問題」	11.14(金)	朝日(朝刊)
49	コーナーキック：すてきなモデル探し 金井篤子・教育発達科学研究科助教授	11.14(金)	中日(夕刊)
50	名古屋大学古楽研究会定期演奏会～ルネサンス・バロック期の西洋音楽のしらべ	11.15(土)	中日(朝刊)
51	国立大、就職支援に本腰 本学は同窓会の組織を整備、就職支援にも役立てる	11.15(土)	朝日(朝刊)
52	名城大でノーベル賞受賞者を囲むフォーラム 野依良治・特任教授、赤崎勇名誉教授が参加	11.17(月) 11.28(金)	読売
53	小林猛・工学研究科教授、上田実・医学系研究科教授らの研究グループ 磁性粒子を使い細胞を効率よく培養する技術を開発	11.17(月)	日経(朝刊)
54	教室 in ザ・ワールド：本学に留学中の劉燕さん 中国、春秋の恒例行事「クラス登山」仲間の結束強まる	11.17(月)	中日(朝刊)
55	次代を担う数学者の卵 本学で開催された「数学コンクール」の入賞者が決定	11.17(月)	中日(朝刊)
56	名古屋大 COE 第8回オープンレクチャー 和崎春日・文学研究科教授が講演	11.18(火)	中日(朝刊)
57	数理ウェーブ 数学コンクールのフォローアップ企画 大沢健夫・多元数理科学研究科教授らが講演	11.18(火)	中日(朝刊)
58	College mode:ボジョレ・ヌーボー3年・丹羽亜衣	11.18(火)	中日(朝刊)
59	医学部附属病院 毒キノコを食べて激症肝炎になった患者の生体肝移植に成功	11.19(水)	読売 他3社
60	ロボット創造国際競技大会(ロボフェスタ) 本学教授ら34人でつくるロボフェスタ2005発起人会(代表：大熊繁・工学研究科教授)が本学で計画を発表	11.19(水)	朝日(朝刊)
61	脳神経外科がセミナー「脳卒中治療の最前線」 吉田純・医学系研究科教授らが映像を使い説明	11.20(木)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
62	名古屋大学シンポジウム「東アジア産業ダイナミズムと企業の再生」中国などの研究者や、中国に進出した日本企業経営者らが報告	11 20(木)	日経(朝刊)
63	探訪ものづくり街道：からくりからロボットへ 末松良一・工学研究科教授「動く物に対する知的好奇心は、人型ロボットへの開発意欲につながっている」	11 20(木) 11 21(金)	日経(朝刊)
64	ノーベル化学賞受賞者・野依良治・特任教授 愛知厚生年金会館で講演「研究は瑞々しく単純明快」	11 21(金)	読売
65	名城大付属高で野依良治・特任教授が講演 ナンバーワンよりもオンリーワン目指せ	11 22(土)	中日(朝刊)
66	法科大学院 来春66校開校へ 和田肇・法学研究科教授「本格的に動き出したのは今年2月、突貫工事だった」	11 22(土)	中日(朝刊)
67	名大サロンの主役：池内了・理学研究科教授「大学論」をテーマに講演 時代に応じた学問を	11 25(火)	中日(朝刊)
68	研究室発：末永康仁・情報科学研究科教授 情報工学 立体画像を医療に応用	11 25(火)	中日(朝刊)
69	中村祐二・理工科学総合研究センター講師らのグループとノリタケカンパニー「すず」の発生状況を観察する新しい方法を開発	11 25(火)	朝日(朝刊)
70	日本学術会議地域振興・中部地区フォーラム 名古屋大シンポジオンホール 名工大学長らが講演	11 25(火)	中日(夕刊)
71	新しい総長に平野真一・工学研究科長を選出 任期は来年4月1日から5年間	11 26(水)	中日(朝刊) 他6社
72	東南海・南海地震予測へ 本学など3大学と海洋科学技術センターが5カ年計画で海底地下の動きなど大規模な調査を始める	11 26(水)	中日(朝刊) 他3社
73	太田龍朗名誉教授と宮尾克・情報連携基盤センター教授らが中心となりNPO設立 テレビ電話でうつ病相談を行う	11 26(水)	朝日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
74	名古屋大医工連携シンポジウム 大島伸一・附属病院長らが講演	11 26(水)	毎日(朝刊)
75	名古屋大大学院情報科学研究科創設記念講演会 荒木純一・本田技研専務が語る	11 26(水)	毎日(朝刊)
76	知の活用へ走り出す大学知財本部：名古屋大学 中部TLOと役割分担	11 27(木)	日刊工業
77	「東京フォーラム」を東京・一橋記念講堂などで開催 野依良治・特任教授の講演など	11 27(木)	日刊工業
78	名大オープンフォーラム 経済学研究科が豊田講堂で開催	11 27(木) 11 29(土)	中日(朝刊) 日経(朝刊)
79	法学部ゼミ コンピューターネットワークを活用した授業を開始 法律実務を学ぶ	11 27(木)	朝日(夕刊)
80	旧7帝大と東工大で組織する8大学工学部長懇談会が「国際競争力ある人材の育成を語る」をテーマに第1回セミナーを開催	11 28(金)	日刊工業
81	ひととき：大島伸一・医学部附属病院長 国立大法人化に向けて重要なのは変革の中身 社会は大局的な提言を	11 28(金)	中日(朝刊)
82	医療ルネサンス：腹腔鏡手術はいま 医学部附属病院消化器外科では危険性も説明し同意を得ている	11 28(金)	読売
83	医学の現場から：脳卒中救急ネットワーク 開業医と結び高度治療も 医学部脳神経病態制御学教室(吉田純・医学系研究科教授)はハード面のシステムを完成	11 28(金)	中日(朝刊)
84	第57回日本臨床眼科学会 同学会の会長・三宅養三・医学系研究科教授に今学会の成果などについて話を聞く	11 29(土)	読売
85	「女性も学問」思い出文集に 新制名古屋大に第一期生として入学した女性でつくる「文月の会」が出版記念会	11 30(日)	中日(朝刊)
86	Weekly教育：岐阜大が構内禁煙化 大沢功・本学総合保健体育科学センター助教授「法人化など山積みで改善への道のりは遠い」	11 30(日)	朝日(朝刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ちょっと名大史

旧名城キャンパス文学部三号館 (明治村旧歩兵第六聯隊第十中隊兵舎)

戦前の名古屋帝国大学には文系学部がありませんでしたが、敗戦直後から文・法・経済の文系三学部を新設しようという動きがおこりました。1947年10月に帝国大学の名称がなくなり、名古屋大学(旧制)になると、この文系学部の設置が具体的に検討されるようになりました。そこで文系学部のキャンパス予定地として、名古屋城二の丸内にあった旧歩兵第六聯隊兵舎を取得(名城キャンパス)。1948年6月にまずは大学本部事務局が移転しています。

文系学部設置には紆余曲折がありました。結局同年9月に文学部と法経学部が設置され(ともに旧制、法経学部は1950年3月に法学部と経済学部に分離)。翌1949年4月には教育学部(新制)も新設されました。このうち、旧名古屋高等商業学校を母体とする法経学部経済・経営学科を除いた、文学部、教育学部、法経学部法律・政治学科が名城キャンパスにつくられました。このキャンパスはその後、1963年に東山キャンパスへ移転終了するまで使用されました。

1965年に名城キャンパスにあった旧校舎のうち文学部三号館だけが、博物館明治村(愛知県犬山市内山1)へ移築されました。この建物には二階に東洋史・西洋史・国史(日本史)、一階に地理・考古・独文・英文の各研究室などが入っていました。ただ、明治村に現存のものは、明治期の建物名である旧歩兵第六聯隊兵舎の名称となっています。また明治村へ移築の時に建物が縮小されており、さらに建物の色も灰色であったのが、現存では鮮やかな白となっています。文学部三号館の面影ではなく、それより以前の旧歩兵第六聯隊兵舎の趣きで改装されて残されたのは、「明治」村である以上しかたありませんが、名古屋大学にとってはちょっと残念な気がしますね。



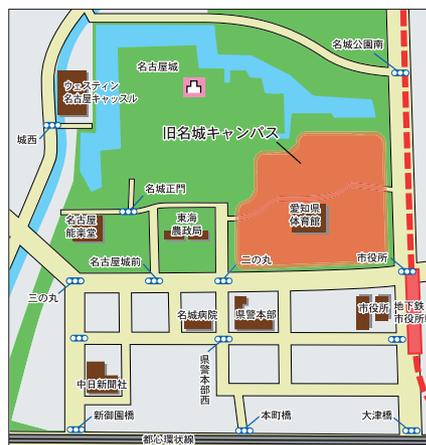
旧名城キャンパス全景
(数字号館は文学部建物、1959年)



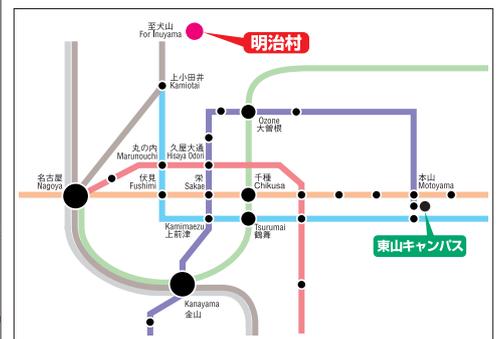
旧名城キャンパス当時の文学部三号館
(後の建物)



明治村旧歩兵第六聯隊兵舎
(旧文学部三号館)



旧名城キャンパス



明治村

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡下さい。